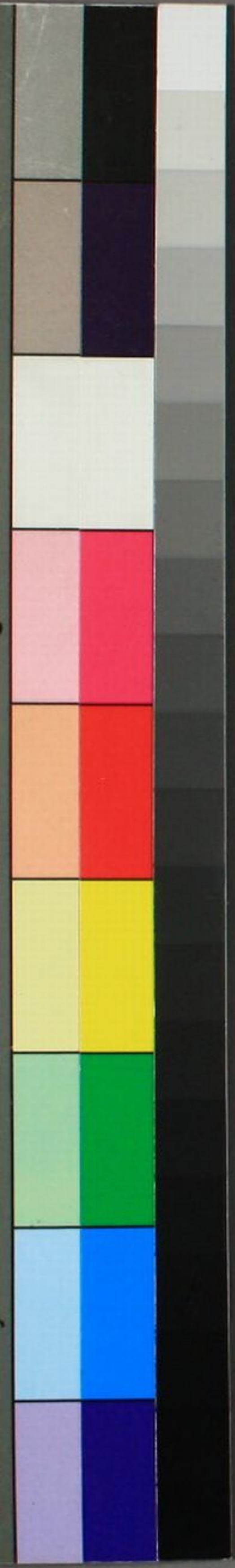


標註枕草絨讀本

三



佐々木弘綱標註 版權所有

標註枕草紙讀本

東京書林

弦巻藏版

標註枕草紙讀本目次

卷三

るんごとき物	一丁	なまめうき物	三	五節	五
無名の琵琶	九	否不替此笙	九	皇后宮の容儀	十
皇后宮の御歌	十一	ねたきもの	十二	かほらいき物	十四
あさましき物	十五	口をきき物	十六	郭公をききふゆく	十七
第一の仰言	廿五	海月の骨	廿五	せんぞく料	廿六
ときころら	廿六	淑景舎	廿八	殿上より	卅四
二月つごもり	卅四	遙なる物	卅五	まさひろ	卅六
關ハ	卅七	森ハ	卅八	淀比日たり	卅八
湯ハ	卅九	常よりも殊に聞ゆる物	卅九	繪ふらきて招くる物	卅九



かきまさらりたる物	卅九	あはきたる物	卅九	初瀬詣	早一
心つきふき物	早七	こびしごふ見ゆる物	早七	阿つげたる物	早八
まづのーき物	早八	むとくたる物	早九	修法	五十
はしたなき物	五十	關白殿	五一	あしこの露	五三
耳か草	五三	定考釋奠	五四	みまなれ成行	五四
六位の坊きぬの名	五六	月秋と期して	五七	鳥のそらね	五八
これ君	六十				



めでたきおん今りふ
とハ心かまうて俗
言よヨイケツカウ
ナキレイナ見ナ
さどりのえまう。

青色染。花葉葉ふ。
麴塵の袍。青色文
桐竹鳳凰とあり。

標註枕草紙讀本卷三

佐々木弘綱標註

めでたき物

六十七段

からふーき。かざりだち。つくり佛のもく。い
ろあひよく。花ぶさなむのくさきさる藤の松ふか
かりたる。六位の藏人こそ。なほめでつけられい
みどき君達るれども。えーもきあをぬあむたり
むねを。心よまかせてきたる。あをいろをがとる
どいとめでたきなり。所のまう。さふーきた。たごの
人の子どもも。かどよて。殿原の四位五位六位も。つ

大饗の甘栗の使云
云の事は次第よく
きぬうようハ、食應
の字言まん、字は格
違三、ううくうけ
りきぬうおうとよ
むハ、とろ。

衛府まろハ、蔵人
よて衛門兵衛まど
を、かねまをりふ。

かさあるこの下ようちみく、何と見えごうりも、藏
人よなりぬれを、えおいとむぞあまも、くめで
たきぬせん、もておぬり、大饗のあまくりのつ
かひなごふまありたるを、もてな、きぬうよう
志給ふさぬ、いづこなり、あまくだり人あらん
とこそおぼゆれ、御むせめの女御后ふれと、ま
す、まだひめ君も、聞ゆるも、御使よてまありた
るふ、御文とり、いろもよりうも、とめ、志とねさ
し、出る袖ぐちなど、あけくま見しものとも
ねがえど、下がさねの志りひきまちら、て、志ぶる
る、はい、ゆさ、さ、さ、の、見ゆ、みて、づ、み、ら、盃、さ

我んまおわゆる
ん、一本よ、このこ
ろ、も、い、ふ、た、ぼ
ゆ、ん、と、あり、此、方
う、ろ、。

三年四年ハ、六位蔵
人よ、あるやど、な
り、よ、ろ、う、て、ハ、大
方、ある、志、あり、
かう、ぶ、り、え、て、お、り
ん、こと、一本、よ、か、う
ぶ、りの、期、ある、り、て
お、る、ぶ、き、わ、どの、ち
う、く、る、ん、ご、よ、と
あり、

し、る、ど、志、給、ふ、を、我、心、よ、も、お、ぼ、ゆ、ら、ん、い、み、ど、う
か、こ、ほ、り、べ、ち、ふ、み、家、の、君、ご、ち、を、も、け、き
ご、の、り、こ、そ、か、こ、ま、り、た、れ、た、ふ、ど、や、う、あ、う、ち
つ、れ、あ、り、く、う、つ、の、ち、か、く、つ、の、ハ、せ、給、ふ、さ、ぬ、る
ど、見、る、ハ、ね、く、さ、へ、こ、そ、ね、が、ゆ、き、御、文、か、あ、せ
給、へ、バ、御、さ、ご、り、れ、を、み、ま、り、御、う、ち、ハ、ち、ご、ま、み
り、給、へ、バ、それ、つ、う、う、ま、つ、る、ふ、み、と、せ、よ、と、せ、む
かり、れ、な、ご、を、な、り、あ、く、物、の、い、ろ、よ、ろ、う、て
ま、ど、ろ、も、ん、ハ、い、ふ、う、ひ、な、き、もの、な、り、か、う、ぶ、り
え、て、お、り、ん、こと、ち、う、く、か、ら、ん、だ、み、い、の、ち、よ、り
は、ま、さ、り、て、さ、か、る、べ、き、事、を、其、御、た、ま、り、る

博士ハ儒家の私オ
有るをいふ紀傳明
徑のこうちあり。

かーこき御前ハ
天皇春宮を申して
おつる。

つふべきよあらば
抄云至りてりて
さ也。

ど申てまどひけるこそ口をうけき昔の蔵人を
こころ此春よりこそふきたちられ今の世は
まじまじらぶをなんさる。まかせのさえある
ハいとめでたしといふもねらるなりがほりい
といけげよげらうなれども世よやんごうとあき
物よおれをれがーこき御前ふちかづきまあり
さつべき事などといせぬ御文の師よてさぶ
らふハめでたくこそたがゆき願文もさるべき
也此の序つくり出してほめらるるいとめでた
し。法師のさえあるさびていふべきふあらば
持経者のひとりてよむよりもあるさる中ふ

御うぶやハ後の御
産のふとを申也。
みやまどめのさち
ふハ主後の左法を
り抄ハ獅子狛犬を
まくこまいぬと見
誤られさるいひが
ことさる。

一の人ハ攝政関白
を申さる。

て時なとさごよりたる御どきやうなどにかほ
いとめでたきなりくらうなりていづら御どき
やうあぶらおそ一かどといひてよこやみたる
やど志のびやあよつげあくるよ。后のひる
れぎやうらひ。御うぶや。みやまどめのさほ
ふ志ーこはいぬ大志やうどるどもてまありて
御ちやうのまへふ志つらひを急内膳御へつひ
つゝたてまつりやど志さるひめぎみみるど聞
えしたる人とこそ。露見えさせぬをね。一の人
れ御ありき。春日まうで。えびどめのおりも
のすべて紫ふるいななりもくめでたくこそ何

女院ハ一條院の母
后東三条院詮子
リ。あがい舎ハ三
院の女御定子の御
妹。中関白道隆
公の御女なり。

えうーとらハ瑩一
たうてみかくこ
し。抄さうし。
か。きののう。濱目
云う。木ハ板木
か。蝶鳥など
板木く。を堂
る白き衣。画。書
さう。

人出させぬ。今二人ハ女院志げいさやの人。や
がてもらからたり。たつの日。あをどりの
からきぬが。みきをせぬ。女房ふだみかね
て。さうもあ。せぬ。殿上人よ。いさ。ていみど
か。て。さ。な。さ。う。ぞ。さ。ち。て。く。ら。う。な。り。た
る。ほ。ど。よ。も。て。き。て。き。ん。あ。か。ひ。も。い。み。ど。う。む。き
び。さ。げ。て。い。み。ど。く。え。う。た。る。志。ろ。き。き。ぬ。ふ。が
と。木。の。か。さ。あ。か。き。つ。る。お。り。物。は。か。ら。き。ぬ。の
う。つ。お。き。た。る。ハ。お。こ。と。お。め。づ。ら。き。中。お。わ。ら
ハ。い。は。さ。う。な。ま。め。き。さ。う。下。づ。か。つ。ま。で。つ
づ。き。た。ち。て。ぬ。ら。る。か。ん。だ。ち。め。殿。上。人。に。ど。ろ。き

廣臣云小忌ハ、役名
之。大忌といふもあ
り。それをつとむる
人ハ多く青摺をき
る故。上文。青
摺き。女房とい
つり。青摺の事を小
忌衣といふ。後世
にて。誤るる名あり。
源氏。おをみ。青
摺。を。み。も。あ
り。と。見。え。た。る。と
思。ふ。へ。

実方の哥。山井
ふ山。藍。を。そ。う。

興。ド。て。を。み。の。女。房。と。つ。け。た。り。を。の。き。ん。ご。ち
ハ。と。ふ。あ。て。の。い。ひ。な。ど。も。五。せ。ち。の。つ。ぼ。ね。を
み。ふ。こ。ぼ。ち。を。か。し。て。い。と。あ。や。く。て。何。も。さ。る。
いと。ふ。と。や。う。や。う。其。夜。ま。で。い。な。ほ。う。ら。い。く
こ。を。あ。ら。ぬ。と。の。な。ま。い。せ。て。さ。も。ま。ま。ど。い。さ。げ。き。ち
や。う。ど。も。此。ほ。こ。ら。び。ゆ。ひ。つ。お。ぼ。れ。出。さ。り。小
兵。衛。と。い。ふ。が。あ。か。ひ。の。と。け。ら。る。を。こ。れ。を。む
と。む。ば。や。と。い。つ。ば。さ。ね。う。こ。れ。中。將。より。て。つ
ろ。ふ。ふ。だ。が。な。さ。ら。ぬ。
あ。ー。ひ。き。れ。山。あ。の。水。を。こ。わ。ま。さ。る。を。い。よ。な。る
ひ。も。の。と。く。る。な。ら。ん。

おとろ人抄るたまき
な人たちとあるハ
日ろおとろき
女房ちち
宮司ろハ中宮大
夫以下の宮司あり

ねぼろけあらうざ
んハ一とかりあ
ねあよハかり

といひかく年日つき人れさるけせうのほどる
れバいひよくきまやあらん返しもせむそのか
さいらあるねとる人たちもうちまてつとも
かくもいもぬをまづうさなどはみまともめ
てきけるふ久しくなりふけるかといらいと
さよことかさよりいりて女房のちによりて
るどかうはおももるなどぞさめくあるか四
人ぞのりをへだててあこれよく思ひえさら
んよもいひよくしやうてうたよむと志りたら
ん人のねぼろけなうざらんいかでかかつ
まきこそいさろたれよむ人ハさういあるい

此哥千載集ふ初句
うハ氷とありあ
をハ俗ふあこ結
とつふそれふ水
泡をいひうけう
結句千載ふとうり
ぞとあれどをのあ
とよる

ことどもりの瘧を
よめる今どもろと
いひさるれま

とめでたからねどねさうとこそはいへとつま
いどきをしてありくもいとをかりたれば
うさごほりあそむむまむるひもまればかざ
ま日かげふゆるぶまのりを
と糸のおとどといふふつとへさもればきえい
りつとえもいひやらずなまうくとみまをか
とぶけてとふにまこことどもりまる入のい
みどらつとろひめでたときうせんと思ひけれ
バえもいひつづけむなりぬるこそ中々もぢか
くま心ちしてよかりあねりのぶるたくりさ
どいあやまといひいまぬる人をもの給ませ

そのどの、式部々
此宮ハ村上天皇の
皇子為平親王を、深
殿式於々と申。

ふ、ゆう夜ハ仁壽
殿。

細太刀以下二節五
節の事ふつり、
上のちよめり、さ
物より、結ま入ら
なぐべし。

しかどあるかぎりむれこちて、ことおもよび、あ
まりこそうさげなめれずひひめをさけま
れうまのかみのむさめ、そのどの此式部卿の宮
の御おとうとの四の君の御を、十二までいと
そのいげふり、その夜の、おひかづきいくもさ
わがず、やがておじゆう殿よりとほりて、清涼殿の
まへにひびのすのこより、まひ姫をさきまて、
うへの御つぼねつすおり、程をうかりき、
ほそだもりのひらをつげ、きよげあるをのこ
れむて、そのもいとあやめか、むらさきの
かきをつみて、ふんおてふさる、のき藤よつら

だいらいより、又五
節の事を立りつり
つふさう。

をうらうの、以下
うらうらら、一本
みをかいうの、を
ある、うへのざう
人のもと、さう、
とくと、云くと有
いらふ、ハ晴る、
事をつふ、
ぬき、これハ、晚垂、
て、草紙中、よ多き、伺

たるもいとをうら。だいらも、五節の、かど、こを、
すどろ、ふ、只、ち、ら、で、見、る、人、も、を、か、う、な、が、ゆ、ま、
との、ち、り、づ、り、さ、な、の、色、々、の、さ、い、く、を、も、れ、
い、の、や、う、に、て、さ、い、き、つ、け、る、あ、ど、も、め、づ、
ら、見、ゆ、清、涼、殿、の、そ、り、さ、い、ふ、も、と、ゆ、ひ、の、む、
ら、ご、い、と、け、ご、女、か、い、で、み、る、も、さ、は、ぐ、
よ、ほ、け、て、そ、の、う、の、み、う、へ、ご、ら、お、ら、い、い、ど、
も、い、み、さ、き、色、ふ、し、と、お、も、ひ、さ、も、い、と、こ、ら、と、わ、
り、なり、山、あ、お、日、か、げ、る、ど、や、な、い、む、こ、ふ、い、ま、て、
かう、ぶ、り、さ、る、を、の、こ、も、て、あ、り、く、い、と、を、か、
う、み、ゆ、殿、上、人、の、ち、ほ、ぬ、ぎ、た、れ、て、扇、や、な、う、や

行事の藏人ハ舞の
間乱入を禁むる奉
行くと江次第見
えり。

帳臺の試の事公事
根元ふくま主上
常寧殿へ御覽あ
り中の丑の日なり

とひやうしふまてつらさまうれど志きをまみ
ぞたつといふうをうさひてつほねどもり
まへさうほほいいどくそひたちたらん人
の心さきぎぬべーかまてさと一度ふわら
ひなどいふいとおそろし行事の藏人のかい
ねりがさねも終りうらとふきよらふんゆと
わちぎしきたれど中々えものなりおす女
房の出るさ海ほめそしり此ごろのこと事ハ
ふらめりちやうごいの夜行事の藏人いときび
ふらもてなしてかいつくろひ二人さらり
ほりいいるまどとおさへておもよくさすぞい

うらやみあり抄云
藏人の詞一人を
入るま他のうら
やみあれいうて
一人もゆるさんと
え。

夕日さう
夕日さう

へバ殿上人あど猶これひとりぞのりまなすど
のゆふうらやみありいかでうやどかういふ
ふ宮に御うら女房二十人ばかりにうら
ことおとさういひたる藏人あふともせむ戸を
わあけてさめきいれバあきれていとこハ
まぢあきせうあとしてたてるまをかそれよつ
きてぞかづきどもいふけいさいとね
ふげるりうへもおろしおしていとをのしと御
覧においよまさらんうら夕日さうの夜い
とをのしとうだいよむうひつる顔どもいとら
うさげふをかうりき。

無名の事拾芥抄は
一中一条院の定子
の御方へもて渡り
夕へりたり。後上東
門院の名物とされ
り。

無名の琵琶 七十段

むめやうといふびとの御琴をうつのもてこ
らせぬへるをえふと志てかきなすしなごどと
いへば引よあらびをまどをてまごりふ志
てこれが名よいかふとかやふときこえさ
ふたぐいとさかなく名もなしとのしほさ
るハ猶いとめでさくこそ費えか。

否不替の笙 七十一段

志げい志やるどりひて御物語のついで
にまろがもとふいとをかげなるさうのふえ
こそあれごどのれえさせぬりとのぬふを僧

淑景舎ハ皇后定子
の御妹女御なり。
さりゆひてハ后宮
の御方へ。
故殿ハかられゆひ
一父君中関白の女

御へすあせの
まなり。
僧都の君ハ中関白
の御子隆田僧都
て皇后伊周隆家
と御兄弟。

都のきこれそれいりうえんふさうべおのれが
もふあでさききん侍りそれふかへさせたま
へと申ぬふをきくもいまたよいど猶こと事を
のぬふいらへさ奉らんとあすたび聞え
ぬよ。猶物のさまねだ宮の御まんのいなるの
へどとねがいうる物をとのしほせらる。いみ
ぢうをのしき事ぞかぎりあき此御ふえの名を
僧都のきみもえ志りぬをさりりれバたさうら
ぬしとぞおぼしためるこれい志きの御さう
おおいしきとさきのうとさうへの御ま
ふいなかへどとつ御ふえのさぶらふく御前

玄象牧馬井上滑橋
無名朽目塩竈二貫
水龍小水龍宇多法
師釘打葉二

宜陽殿ハむろ樂
器書籍等を置ろ
所なり

ふさぶらふもれども、琴も笛もみまめづし
き名つきてこそあれびと、げんぢぢやうほくばあ
へお、うむめやうもど又わづんるどもくちめ
ほがは二貫もどきこゆるをもろうこもめろ
ううのほろくぎうちもたつたふくれと
ねほくきこえかどわされよけりぎやうでん
の一のたるふといふことぐさハ頭中將こそ志
こまひか

皇后宮の容儀 七十二段

おやとるぶ抄
みどりき灯臺こと
あり
た、ごまハ堅ごま
なり

らふにぼぶざかうしをよみらぬよたほとるぶ
らをよし出さればとのあきたるがあらはるれ
びとの御ことをたごはみもたせぬけり
れるあの御どのいふもよれつねなるうちき又
まうたるもあやも奉りていとくろくつや、か
なる御びとも御どのそでをうちうけてとらへ
させぬへるめてたきにそバより御ひたひのみほ
どきろくくぢぢかふてわづうあんえさせぬ
るいふもよぶきかこちくめでたしちかくぬ
へる人よよしよりてまのバかくたりんも
えのういあらぶうけんをれちさだ人よこ

琵琶行ハ千呼万喚
始出来猶抱琵琶半
遮面とあるを思ひ
てけり

こゝちもなきをい
彼女房ハ琵琶行を
きく志々々々々又
一本ハ道もなきを
とありいづれよて
もよろし。

そありけあといふをききてこゝちもなきをわ
りなきをわりなきけいりてけいもれはこら
ハせぬひて我ハ志りこりやとなんおほせらる
るどつこふるもをい。

皇后宮ハ御歌 七十三段

御めのとれたつふのくふひうがくごさふた
まいもるあふきどものをふかこつかたふハ
日いと花やかふこいいでたび人のあるとこ
ろ井手ハ中將のたちなごいふさまいとをか
うかきていまかたつこふハ京のかと雨いみ
どうふりたるふぢぢあふる人などかきたるふ

井手の中將ハ古き
物語の名をもつ。

此御哥詞花集別ハ
入さり。

こゝちもハことふ
うてぢハ新字より
ねごやうあらん。

ねごきハくや
残念なることあら
り。

あうねさの日ふむうひてもゆもひいでよみ
やこいそれぬぢぢあすけんよ。
おとぢふ御手づうらかせぬひーあられるり
きささるきみをおきたてまつりてとほくこそえ
いくまどくれ。

ねごきも 七十四段

これよりやるも人のいひたる返しもかきそや
りつるのちもどひとつあつぢぢおむひな存
したる。とみの物ぬふおぬひもつとおもひ
てそりをひきぬきたればさやう志りをむもバ
やうらり。又かつごまおぬひさるもいとねい。

こよりうへさま
みぬひなる物語
南院の四條の北壬
生の西ふあり中閑
白道隆公の居所と
きこえり
ふれあそひ美隆云
たふれのたそひ
脱るる女おこや
かろく
ひらぬきの御そい
平きぬの裙の錯乱
ふや平信八栄花を
とみ多く見えり

みるみのみんふたひしを比ふのたいふ殿
れれしすけかふ宮もおひしませば志んで
んふあつよりみそくぐりくればふれあそび
をわさどのふあつまりみまど志てあるにこ
れ只今とみのもはるり誰もたれもつまりて
時かそそぬひくまあらせよとてひらぬきの
御ををのハせされをみるおもてふあつより
みて御ぞかこみづ誰うとくぬひ出るといど
みつちうくもむういずぬあは後もいと物ぐ
るほし命婦のめのとひとくぬひとてうら
たきつるゆぐけのかこれ御身をぬひつるがそ

御せあハせんとも
れハ抄衣の首
を合せんとする
り

○七字一本より
是より

弘綱云いひまほ
のいぬの誤り
縫直しそと

むきぐぬなるをえつけどとらめも志あへどま
どひおきてこそぬるに御せあハせんともされば
そやうたがひよりうらひのそありてこれぬ
ひをなせといふをたれがあまうぬひうりと志
りてかおほさんあやあどならぶこそうらをえ
づらんぬひたぐり人のけふをやあむもん
れ御ぞやうなふを志すうらをかかを人ふれ
あらんたごまごぬひぬもざらん人ふなほさ
せよとてきくもいさねばさいひてあらんやと
て源少納言新中納言などいひなほしあひか
ほえやりてみづりこそをうかりうこれ

これハよきハ今
夜参内あるべき御
料のぬひ物と云
おろせの上よこそ
の二字ねちしるる
べし。
こくより又ねこき
物なり。

長櫃古ハ草花など
をかりて人ハ贈る
ハ長櫃よ入らる事
所々ハ見えたり。

ハるさりのぼらせぬんとてとくぬひさうん
人をおもふとあらんとおほせらましう。
是もあざき人よほしくやりたる文とりたがへ
てもてゆきさるわさしげふあやまちてらうと
いひさで口かきうあらがひたる人めをさるた
もさびらまらうちつべし。ねもあろき萩
さくさるるをうゑてさるほど小長びつもたる
もれすきさるひきさるげてさるほうふほりてい
ぬるこそわびしうわさかりくれよらき入る
どのあるをうらうもせぬものをいみじうせい
はれどなきさういひさるいぬるいあかひ

なわげふ物いひハ
おごりて無禮ふ物
うちしるる。

まのびて一本ふま
ひてとあるうよ
ろし。

あつてハ怒ドてこ
かいらみみてハふ
まはまるじ身あま
ふるり。

なくねさし。ずやうなまどのきくをなめげふ物
いひさうとて戒をばいかおと思ひさるげもひ
ふいひ出さるいとぬさげたり。見さまざき入
れ文をひきとりて庭ふたりて見さるるいとさ
びしうねたくおひくゆけどものちとみとまり
て見るこそとびもいでぬべきさうちとれ。を
ずろなる事さうごちてたふし所もねむみど
くり出るを志のびくひきさるれどわりなく心
ごとさればあやうよなりて人もさばよこのかり
とゑドてかいくみさふしぬさのちいとさむ
きをかりたどみ只ひとつきぬむのりよてあやよ

はは
おま
はは
おま

枕草子 卷之三

物云うちひいひ
よのつよねこころ
をふくむる。

かこもいひこまひ
俗は笑止ナキド
クナといふ意なり。

くがりて大かこみる人もねころふさそがふた
きをらんあや志くて夜のふくるまほふねこく
たきてぞいぬばかりなるなど思ひふしたるに
たふもとも物うちなりあど志てたをろし
らればやをらまるびよりてきぬひきあくるに
そらねしたるそいとねこられるほこそこい
がりのをめさどうちいひさるふ。
かたをらいこき物 七十五段
すらうとふどにあひく物しあふおくのかこふ
うちどげごと人のいあをせいせできくこころち
おもふ人のいたくゑひてたやど事あくる。

つうひ人なれどふ
の人をらばつうひ
人なりともなるとい
ふべし心をつくべ
きなり。

ぶえあるは学オあ
る人なり人の名は
古人の名なり。

きれあさるをもあらで人のうへいひたるそれ
い何ぞかりあらぬつうひ人なまどかこもらい
たし。旅だちしる所ちかき所なごうてげをど
このづれうそしたる。よくげなるちごをおの
まがこころちふかきしとねもふまゝにうつくし
みあそむしづれがこゑのまねうていひつら
事なごかさりたる。ぶえある人のまへうてざ
えさき人の物たがえうほふ人の名なごいひさ
るこころふよりともおぼえぬ我うさを人あか
りきかせて人のほめし事なごいふもかこも
いたし。ひとのたきを物ごうりるごをらかこ

枕草子 卷之三

いとくしう一本お
いとどうとありこ
れよろいかるべし

あさほしきもの
奥ノサメルキモノ
ツブレルまじり
ころろさり

おののうひひろく
ゆさるる意ん字
治拾遺三よあさま
しうおののうま
つ物さまどき
てねいりぬとあり

いらふあさほしううちとけそねたう人。やまご
ねもひきとものへぬ琴を心一つをやりてさや
うれうたふりつる人のまへよてひく。いとど
あうさやぬむこのまづき所よてさうとお逢
たる。

あさほしきもの 七十六段

さうぐしみぐくふ物よさへ折たる車
うちかへられたるさうおののふる物ハとこ
ろせく久しうなまどやあらんとこそおもひしう
只ゆめの心ち志て浅ましうあやましく人のこめ
おまづのしき事つみまなくちごもたるとまも

讀詞花戯咲部達事
いかをとりはる
山鳥今いかうとど
ねいまるけれ

賭弓ハ正月十八日
なり久トうありて
ハ引志がりてさむ
る間

くちをきハザン
子シナクヤシイ。あ
どいふ意あり

いひくる。かちらびきふんとねもふ人をまぢ
あうてあうつきがさふいさうかまをれ
てねいりたるにからまのいとちうくかうとあ
くふうち見あげたればひるまありしういとほ
さま。てうまみふどしうまはさる。むげふ
あうびんぶきかぬ事を人のうむうひてあら
がハまぶくまわくいひくる。もはうちこぼ
たるもあさま。のり弓よまなうく。ひさ
あうありてさうしる矢のまてとあられてこと
かへ行たる。

くちをきハザン 七十七段

世ち急一本五節
仏名よあるよよ
るべし。

せち急一本五節
仏名よあるよよ
るべし。

よういさげうら
ず抄云用意ありさ
まの長閑よ優らうら

せち急佛名小雪ふらで雨のうきくらふりた
る。せち急うらべきをりの御物いみよあり
たる。いとふみいつらとわむひらる事のさ
いふこと出きて俄ふとよりらる。いみどうを
る人の子うまで年比具うらあそびをもしん
むべき事もあるふ。必きさんと思ひくよびふや
りつる人のさいる事ありてあどいひてこぬく
ちそく。男も女もうらづうへ呼さどふおれど
やうなる人もあともふ。寺へまうで物へもゆく
ふ。このもふうこぼれ出てよういさぐからむ。
あまう見ぐるらとも見つべくいあらぬふらる

わびていあまう見
せまやきあ打と
びてハのころこ

べき人の馬ふても車うても行あひ見むありぬ
るいと口をわびくいむきぐまうらんげむを
どよても人ふかうりつべからんよてもうか
たむふもげからぬをありらる。

郭公を聞ふゆく 七十八段

五月の御精進ハ佛
道よある事うて年
三とて正五九月よ
精進を事へ
ぬりごめハ帳臺の
やうみして本尊を
二間ふ安置を所
るるべし。

五月の御さうらのほど志きふおいらまをふぬ
りごめれまへふらまなる所をうとに志つらひ
まさればれいぎはならぬむをのついでらる
雨がちよてくらむくらむつれぐらるを郭公
れ聲たづねありかばやといふをきうてくれも
くれもと出たつ賀茂のおくおなふがとらる

なふらうとらやハ
賀茂のおくは鶴川

枕草子 卷三

柳川
車
約
三

又浮橋をとりつゝ所
有しや

北の陣抄云大内裏
の御平門なり

馬場とつゝ所河海
抄左近馬場ハ一
条西洞院右近馬場
ハ一条大宮なり

たなむこのわさるもよもあらでふくき名ぞ
きこえしそのそくりみまん日ごとふたくと人
れいへむそれハ日ごらかりといらるる人を
ありそとつとて五日のあしこやづらさ車北
こといひて北のちんよりささぐれはとがめさ
き物ぞとてさよせて四人をのりぞのりてゆ
くうらやまがかりていまつたておびどくハ
るどいへばいさとたほせられなきもいれ
どおさけるきさほまて行ふ丸山左近の馬場所よ
て人おなくささぐらふごととるぞととへばて
つぐひよてまゆみいるあり志ざし御らんとて

右はたの強し

あきのぶの御所の
家ありとありのま
トあるくごよん
みらりの簾みくり
ハミ接之哥ふみく
り纏とよむ俗ふウ
キヤガラ又アハビ
草とまいつりごれ
と簾の製ハ今ハと
れごご
おまへハ皇后宮ふ
なり

ねとちあせとてくるまともめつり右近の中將
みかつきぬへつといへどさる人も見えぬ六位
おどのちちうはよくハゆうかちぬくとぞぞ
やくとぎよとてゆきまてゆげと道もまつりれ
ころおもひ出られてをさうがうり所はあ
きのぶの朝臣いへありそこもやがてんんとい
ひく車よせおりぬおまのち事とぎて馬の
かさかきたるさうどあどろびやうぶみくりの
もぐれるととさうらふむくの事をさうついで
でさう屋のさほもさかたなだちてさちのくあ
さハかちれどをさうきふぶぞかかまうと

枕
巻
三

思ふばりまふふきあひくるほとくきの声を
口をう御前ふきこめさびさばかりさび
つる人々もさびと思ふ所よつけていかう事
をふん見るべきとていねといふおほくも
りいでくわうき女どものきたあげあらぬ其わ
たりの家のむものをまをよるどひきあてきて五
六人志てこかせ見も志らぬくるべきもさ
り志てひうせてうたうたいせさるるをめづ
らしくてわらふふ郭公の歌よんささど一つ
わされぬぐから魚よあるわうさるかけらん
かどして物くをせさるるを見いろく人をけれだ

くらげきハ和名抄
蚕絲の具ふ反轉久
流閉釈とあり

此下或は本下
石下ん
失せし流

あるも一本ふるほ
もとあり此方より
し猶も出せくせん
とふ意さるべし
つきさるては着並
あり

家あるドつとわろく田舎ひるびたりかある所ふき
ぬる人いワルクスようせびい何るもなまどせめいだして
こそまあるべくれむげふかくて其人なおらば
かどいひくとりとや山此下わらびいてづうら
つらつらむどいへばいかで女官さののやうま
ほきるみていあらんなどいへばとりおろして
れいのそひぶいぶふふらいせぬへるおまへたち
かまばとてとりおろいまうふひささいぐかどふ
雨ふりぬべいといへばいそぎて車ふのるふさ
てこのうさいこいよてこそよまめといへばい
ふれいらいもなまどいひて卯花いみドくさい

木下 三三

あどろハ車の細代
あり組さる物なれ
バるを突ねきて卯
花をさるる。

近うハ皇后職の御
曹子ハ近くきぬれ
ハるり。

一条殿ハ恒徳公為
光侍後ハ為光公の
六男公信卿あり。

たるを折つてくる海のさざれそはなごふなごの
き枝をふきさうたればたごうのいながさねを
こつふかけたるやうふぞ見えけるともちちるを
のこどももいみじくわらひつてあどろをさへ
つきうがちつひおこまごしつとさあつむ
なり人もあられんと世もふよさらふあやき
法師あやしのつあひなき者のみたまさか
小見ゆらいと口をちううきぬれをさうとも
いとかうてやまんやハ此車のさばをさふ人ハ
かさらせてこそやまあとして一条殿のちとあ
どあて侍従殿やおとすは郭公の聲きうて今

まひろけてハくろ
ろぎとらみご
るさるるべし。

道のちよハ道
ゆく〜 活ふ意
て道す〜とい
んかご〜。

いそがしくてのく
文字一本さき方
ろし。

猶ゆりて見よハ抄
ふアジかく笑ふを

なんかへり侍るといせせとるつうひたご今ま
あるあごきみく〜とちんのぬへるさぶらひふ
すひろげてさ〜ぬきたてまつりつといふふま
つづき〜もあら〜とて〜らせてつちみらど
ごぬ〜やらさるふいつのまのりさうぞくちつ
らんねびハ道のちよ〜にゆひて志ど〜とに
ひくるともふさぶらひさう〜きむれさうてそ
しるめさ〜と〜やれといと〜いそが〜てつち
みうどふきらきぬるふぞあつぎすどひておそ
してまら此車のさばをい〜くわらひぬふう
つ川の人の乃りたるとあんさ〜ら小見えぬ猶お

枕 三三

清少よ下て見よと
こと有が如し。

うへもさくハ屋根
ちまぐ作り出らん
なり。

あう一本よあうと
もあうともあり嘆
しるさうすごう
帰り往んも無與る
らんとあうべし。

りて見よなむどわらひぬへばともなりつる人ど
もを興どつらふ哥をいかふのそれきかんとらの
たまへば今おまへつ御らんせさせてこそはる
どいふ不どふ雨すことにはりぬたどりこと御
門のやうふあらで此つちかどしもうへもさ
くつくりそめけんもけふこそいとよくけまを
どいひていりて帰らんむらんこなごさ海ハ只
おくれどと思ひつらふ人めもあらばしうられ
つらをあういんこそいとをさ海ドラれとの
たまへばいざぬかしく内へあどつふそれも急
ぼうしよていいかでうとりもやりぬ人をどい

まありこれハ后皇
宮のお前み清少の
帰り参りこれハな
り。
あうハ怒恨みま
あり。

ふふすめやりふふれバがきなきをのこどもた
どひきふひきいれつ一条よりかさをむてまこ
るをさうせてうち見のへりうち見うへり此た
びるゆるゆると物うげふて如花をかりをとり
たをとももをうしうすすおりたまバありや海
なむとハせ給ふうらみつる人々急ド心うがり
たづねら藤侍従一条のおぼちをうまつるやど語
るふぞまなむらひぬるさていづら歌をことハ
せ給ふかりくとけいもれバ口をの事やう人
人なごのきおんふいうでうをかきまなくてあ
らん其きつらん所までふとこそよま海しう

枕
草
紙
卷
一

きき事さあつらん
の抄儀式めき
てよまんととらふ
よりて哥のおそけ
ねば無さめつらん
と云

とくいへハ早くよ
めと皇后ののぬ
るあり

あまりぎき事さあつらんぞあやきやこあ
らてもよめつかかひなりなどのさすをせられ
げよと思ふよいととびききをいひあをせると
まうほどお藤侍後のありつらうの花よつけて
卯の花のうとやうふ
ほとぎんなくねたぐねお君ゆくときりバ
こおろをそつも志てす
かつららんやどつげねへさざりとりおや
れが只うれ志てとくいへとて御さびりのふ
おかみなどいきてたはせされ宰相のきみ
かき給つといふを猶そこみあといふおどおが



おどろくしうい
いみどら雷の鳴る
り
志とみそをハ格子
のうへみ蘇をおろ
しとらり

入まへハハ又る
り
宿せるとき日ありと
倦トてハ抄子あふ
縁なき日と動
ての心也といへる

きくらし雨ふりて神もねどろくさうなりたれ
バ物もおほえび只おろしおねろ志きの御さ
らし志とみそをみうしにまありわたしま
どひいねどみうこのつりごともわもれぬい
とひさし鳴てどろくやむほどいらくさり
ぬ只今をほその御返事奉らんとてとりかゝる
ほどお人々上達部など神の事申おすあり給ひ
つまむ西行やてお出てもものさどきこゆるほど
おまざれぬ人もさしてえらんこそあらぬ
とてやえぬ大う此事おまきせなき日かりと
う志ていまいひうでさかんいきたくしとごに

ハわろし。

とぞおどろくべき事かいかくおそく不興なる事の有べき事うはと皇后ののめいするありむほどの誤るるべし

人ふきうせとぞわらふをいほもなとそれ
いきたりー人どもものいさざらんぞれどもせ
トと思ふよこそあらぬと物しげふたげしめ
ころもいとをのしとれど今いささほとらなり
よて侍るなりと申すすまふかすべき事あり
るどの給いせしうむやまふき二日むありあり
てその日の事なごいひ出るふ宰相のきみい
ふぞ手げのしをりたるといひし下わらびも
の給ふをきよせ給ひて思ひ出るころとのさぬよ
とわらもせ給ひて紙のちりたるふ
あささらびこそこひしかりけれ

もと上句をいふ
うけたりたりや
おしされてもか
りなく藤を賞する
事をいふれのと
まふまふ

数ものもた一本
をもちくへへり
春ハ冬の哥をよみ
云ふこのころハ
ハひさしとて侍
まふまふ侍

とかあせ給ひてもとといへし仰らるふをか
ほとぎんたづねてきこふこふよりと
とかきてまわせたまふいとううけたりたり
やかうまでだふいかで郭公れこをかけつら
んとわらハせたまふとらういふ何うあ
れうとまづてよみ侍らトとぞん思ひ侍る物を
ものれをりあど人のよみ侍るふとよめあどた
ほせらるればえさぶらふまふき心ちあん志侍
るいのでうはもとのかむもあふと春ハ冬の哥
をよみ秋を春のをよむ梅のをりの菊などをよ
む事ハ侍らんぞれど哥よむといふれ侍りし

皇后の御母より清
少をさして君との
ぬへり。

深養又の孫元輔の
むむめといわれぬ
身ならあうらば今
夜の奇ハ先第一よ
よまん物をとる。

うほどふいささかたる御文をりきてたまはせ
たりあけて見れば。
もとをけが後といまうきみもやこよひ
れうさふをばまてををる。
とあるを見うにをかき事ぞうびささ
やいみどく笑へむ何事ぞくとわらうと
の給ふ。
そは人の後といわれぬ身なりせばこよひの
うたとまげぞよほまう。
ついに事よあらはむい千歌うりともこれより
ぞ出まうてこまうとけい一つ。

万歳抄小御かこ
この上よあきお
なますは八月十
四日の月ありき夜
云々とあまも語
重りてよろも
おがえねい書加へ
ず。

一乗の法抄云是方
便品の文の意也
為第一の経るれ
彼清少の第一ふ思
はまん二三よてハ
あらドといふよつ

第一の仰言 七十九段

御かこく君違うへ人ろど御前小人多く候らへ
バびさの柱ふりかりて女房と物語してあ
たふふ物をなげぬいせさるあけて見まと思ふべ
しや否や第一あらむバつのがとやをせ給へり御茶
よて物語うどもついでふもよてて人うハ一
ふ思これむ更ふ何ものせん只いみじうふくま
れあうせらまてあまんこよてハしぬとも
あうド一よてを有んるどいへバ一乗の法うり
人々笑ふ事のもぢるわり業紙給をりたれば九品
蓮臺の中ふハ下品とりふともと書てまおらせ

けて人々なぞらへ
いひ一幸の筋を今
皇后宮の第一あら
むハいうがと仰ら
る事也。

隆家卿ハ皇后宮の
御兄弟よ伊周公
の御弟也。

れどむげふ思ひらんドまけりいとわるいひそめ
つる事ハ扱こそあつめとの給はれバ人よ順ひ
てこそと申はそれごとろきぞの第一の人よ又
一よ思はれんとこそ思はれと仰せらるるもいとをかし

海月の骨 八十段

中納言殿まおらせ給ひて御扇奉らせ給ふ隆
家こそいみどきほねをえて侍まをまをせ
てまゐらせんとするをおろけの紙いとま
どくれを求め侍らるいと申給ふいとやうあるふ
りあるとやひ聞えさせ給へばまべていみどく
侍ら更ふまじ見ぬほねのさま也とやん人々申

くらげのこハ増賀
上人の哥よみつえ
さけやそちあまう
の老の浪海月れか
ねよあひまけるこ
あ

信経ハ中納言兼輔
の曾孫為長の子
長徳三年正月式部
丞に任ず

まらとふかむのりのハ侍らざりつとごと高く
申給へばさて扇のふいあうでくらげのなりと
きこゆれバこれハ隆家がことふ志てんとて笑
ひぬふかやうの事こそかとははういたき物のう
ち小入つべたまど人毎よなゆらそと侍れが
いめがハせん

せんぞくまう 八十一段

雨のおそへふる比々ふもふるふ御使よて式部
のせう信経まありたり例の志とねさし出さ
るを常よりも遠くわたりやりてあはれバあれを
誰がれうぞといへば笑ひてかぐる雨ふのぼり

せんぞくわうハ種
褥料ヲ洗足料をか
ねて戯よいへるこ
種褥ハ毛席之和名
抄見えり。

おみきまの宮九
條師輔公の女村上
天皇の皇后安子之
康保元年卅八まで
崩皇太后宮ハ贈官
あり。

侍らばあーかこつきていとふびんふきこるげ
ふなり侍りるんといへばあどせんぞくまうふ
こそいなちらめといふをくれハ御まへふかーこ
うおわせらるるふちあゝむのぶつねがあーが
この事を申さざらまうらぶえのこまいざま
しとてかへもくいひりこそをかーありしあ
まりある御身がめりれとかこもくいこく。

ときから 八十二段

はやうおんぎさの宮よ。忍ぬくきといひて。名
高き志もづりへなん有る。美濃守よてうせよ
ける藤原の時から。藏人なりける時下づらへど

時柄。康保五年美濃
守。長保二年藏人兵
部丞。被補作物所別
當。抄見ゆ。

とも。一本まより
て。さへつり。

ふみハまのの詩を
いへり。げよま事
抄云。是ハ時から哥
えまぬ人るね。ば
題出。て哥。あ
て。物。が。く。せん
て。い。へる。詞。なり。

もある所よ。立ちりて。らねや此高名の忍ぬくき。
なごさも見えぬといひける返事よ。それハとき
からと。さも見ゆる名也。といひりるるんか
たきもえりても。いさでさる事ハあゝんと。殿
上人上達部までも。興ある事ハのあひらる。又さ
りりるなめりと。今までか。いひつたあるハと
まこえり。そま又時柄がいもせ。つる。こも。べて
題出。が。ら。る。ん。ふ。み。も。歌。も。か。こ。き。と。い。つ。だ。
げ。ふ。さ。る。事。なり。さ。う。だ。い。出。さ。ん。歌。よ。み。あ。ん
といかよ。いとよき事。ひと。い。な。よ。せん。あ。る。ど
う。い。あ。ま。し。を。つ。つ。う。ま。つ。ん。を。ど。い。ふ。ほ。ど。ふ。

つゞも呀ハ拾芥抄
小作物所在進物所
画有別當須熟食
急やうハ画様して
画のかこちをさき
まをり。

抄におかきさき
ことある。あや
やう

御題ハいでぬればあたまをさる。まのり心でぬ
とてさちぬ。手もいみどらまもかんさも何
うかくを人をもさるひさるどとれはかくしてさん
あまといやまをうづも所の別當さる比をま
ごもとふやアけるふうあまん物の急やうやる
とてこれがわうふつのもつるべしと書こま
んたのやうもどれ世よまらむあやしきを見
けてそれがかささうよ。これがまふつかうま
つづば。こもやうあまをあるべられとて殿上よ
やりさねむ人々とりて見ていみどらう笑ひける
ふ。おろきふもさだちてこそうらみ。

さ。び。一。か。う。う
て。わ。か。き。よ。ま。ま。ま。ま
の。二。字。を。か。う。う

いうぐはめてさ
らざらんがぞさ
らぬ事なりこのま
え。よ。ま。ま。ま。ま。ま
うよいひ定むるま
法。か。く。る。例。ま。ま
皆向トをいづハ
の下分を切べし。

登花殿ハ弘徽殿の
西あり。ことび皇
后の淑景舎ハ御對
面の御志つらひの
御殿なり。

淑景舎 八十三段

まげいさ春宮ふまありぬ。ふほどの事なご。いか
がもめでたう。ぬ事なり。正月十日よまありぬ
ひて。宮の御かこよ。御文なご。まげうかよ。へど。
御たいめんなど。ちなきを。二月十日宮の清の
ふわさり給ふべき御せう。そこあれが。常よりも
御志つらひ心。こともみ。ごきつ。くろひ。女房なご
も皆。まうい。ま。さ。り。夜。あ。の。ご。り。お。わ。こ。ら。せ。ぬ
ひ。う。だ。い。く。ご。も。な。く。て。あ。げ。ぬ。と。う。さ。い。で
んのひんが。の二間。お。御志つらひ。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま
とめていとご。御かう。ま。あり。わ。こ。して。曉殿

殿ハ中内白道隆公
うへハ北方高内侍
よみて儀同三司母と
しハ是るり皇后淑
景舎さどの御親也

積善寺供養ハ栄花
見えてぬ夢ハ攝政
殿の法興院の内ハ
別ハ御堂たてさせ
給ひて積善寺と名
づけさせ給て其御
堂供養いみじくぞ
いそがせ給ふ云々
とあり正暦三年の
ことなり

うへひと川御車よてまゐりぬひよけり宮ハ御
ざうしの南ふ四尺の屏風西東ふへどて北西
ふして御をみ志とねうちおきて御火をけ
むのりまゐりたり御屏風の南御帳の前ハ女房
いとおほくさぶらふこなさよて御くしるどま
あるやど志げい志やを見奉りしやとどをせ給
へばまごいのでか志やくぜんどくやうの日御
うしろをわづらふときこゆれたむ其ころらとび
やうぶとのもとにうりて我うしろより見よ
とうつしき君ぞとのさまをすれどうま
ゆのうしろをさりてい川しうと思ふこうむいの

紅梅ハ表紅裏紫を
つふ十一月より二
月まで着る衣なり
故ハ早珠らしか
らねば着ずしてし
あらんとするこれ
ハ二月十一日の頃
なるまじなり

みざりいでさせハ
御ぐの事御装束
など事とみて皇后
の出たまふなり

かとうんうきむんの御ぞどもふ紅のうちこる
御ぞもへがうへふ只ひきかさねて奉りころよ
ころむいよハこききぬこそをうられ今ハ紅
梅らきでとありぬべうれどもえぎなどのふ
くくれだ紅ハあそぬありとのさまをまきど
只いとめでたく見えさせぬふ奉りころ御ぞふ
やぐて御うちのふほひあちせぬふぞ猶こと
よき人もくくやねをますらんとぞゆりき
さてぬざりいでさせぬねだやぐて御びや
うぶよそひつきてのぞくをうらめりうろ
めさきわざとまきこえご川人ごといとををし御

女房の裳をめぐりハ
御母多ねど皇后ハ
の礼義ハ高内侍の
かりそめハ裳をか
け給へるをいふ。

げふめでつくハ前
お皇后の淑景舎を
うつくしき君さう
とのさまひーを
けてげふと清少の
見て思へるをいふ。

こがしきまふむき
てハ清少の今のぞ
く方ふむきて関白
殿のおもてするを
おゑみてハ后官淑
景さうの御かま
を関白殿のよろこ
びがほふ見さま
るさまなり。

宜耀殿貞観殿とも
ハ淑景舎より登花
殿よりゆく道つぎ
なり。

あゆらどれひるうめきこねだ。いとよく見ゆら
へも。あろき御ぞども。紅のまうらる。二つさのり。
女房のちをめぐり。ひきうけておく。はよりて。東に
もてふねも。もれ。たゞ御ぞなど。ぞ見ゆる。志げ
い。あやも。北よす。こ。よりて。南むき。よれも。す。紅
梅ども。あや。こ。く。う。す。く。て。こ。き。あ。の。御。ぞ。を
こ。あ。か。き。ま。ま。う。の。わ。り。物。の。う。ち。き。も。え。ぎ。の
く。こ。も。ん。の。わ。の。や。あ。なる。御ぞ。奉りて。扇をつと
さ。か。く。し。あ。へ。り。い。と。い。ま。く。げ。ふ。め。で。た。く
う。つ。く。と。見。え。ぬ。お。殿。ま。う。す。い。ろ。の。な。か。も
え。ぎ。の。わ。り。もの。御。さ。ぬ。き。紅。の。御。ぞ。ども。御

ひもさうて。ひさの柱。あら。ろ。を。あ。て。こ。な
ご。ま。ふ。む。き。て。た。す。す。め。で。こ。き。御。あり。さ
ま。ども。を。う。ち。き。み。て。ま。い。の。こ。も。た。ら。ご。を。せ
せ。ぬ。お。志。げ。い。志。如。の。志。よ。か。き。た。ら。や。う。ふ。う
は。く。し。げ。よ。て。あ。せ。ぬ。へ。る。よ。家。い。と。や。ま。か
ふ。い。ま。ま。さ。う。お。と。な。び。さ。せ。給。へ。る。御。け。き。の
紅。乃。御。ぞ。に。白。ひ。あ。せ。ぬ。ひ。て。猶。た。ら。ひ。い。の
で。う。と。見。え。さ。せ。ぬ。お。御。て。う。い。ま。あ。る。彼。法。う。ぬ
ら。せん。よう。で。ん。ぢ。や。う。ぐ。わ。で。ん。を。と。ほ。り。て。わ
ら。も。二。人。あ。ら。づ。く。へ。四。人。と。て。も。て。ま。あ。る。あり。
ひ。ら。び。さ。の。こ。ま。こ。の。ら。う。も。ど。女。房。六。人。を。の

女房の裳をめぐりハ
御母多ねど皇后ハ
の礼義ハ高内侍の
かりそめハ裳をか
け給へるをいふ。

せげーとして、登花殿よこなすかゝるの女房つどひされたり。

この御方ハ、皇后の御方をりよ。番の米女ハ、其日の御手水の時役の番よあされる米女をりよ。

りさづらふせをーとしてかへる御おくり志して
みまのへりふけり櫻のかざみもえぎさうざい
るどいみづくかざみあがく志りひきてとりつ
ぎまおらまといとあまめうーたり物のからきぬ
どもこびれ出てすけまそのうまのうまのむむ
め少將のきみ北野の三位のむむの宰相のきみ
などぞちうくハ何ふあふをこのーと見るやどふ
この御うこの御てうづぶらんぬねあををを
この裳のうぎぬくんといひきまどしてたて
まどいと志ろして下ばのうまどさうはぎてま
みるやどこれさうおわやけさうのうめいてを

藏人ども、この女蔵人なり。

かられ装とくれろの清少のせきみみーがうくれ野るきを面白くといていつろなり。

霞の間よりハ清少のほのかよみゆるそのこまふなり。

古き得意ハ清少ハ以前より知りたる

かーおをれのをアふなりてみぐーあげまみり
て藏人どもまこのまひのかうけつてまみり
ほどふへどてたりつる屏風もたーあけつまを
かいまみのくうらぬみのとられさる心ち志て
あうびわびーくれぬみもと几帳との中よて柱
れもとよりぞ見奉るきぬのをを裳をどかき
ぬもみふすのそとみわー出されれば殿の
まーのかさより御らんど出して、うそや霞のま
より見ゆるハとさづめさせぬふふ少納言が物
ゆうーがりて侍るさうんと申させぬハあれ
さづめーかまをさうきとくいをいとあくげふ

人あつとつゝふ意
なり。

翁女ハ、関白殿みづ
かゝと北方とをさ
れてのたまへり也
女ハ、ごゝハ老女の
義子用ひしるまれ
バ、おむすこよむべ
きなり。
大納言殿ハ、伊周公
三位中將ハ、隆家卿
松君ハ、伊周公の男
左京大夫道雅の童
名なり。
所せきハ、ごゝし
き意なり。

むむもめども持しりともこそ見侍れどどの給
ふ御けしきいとさうりおなり。ゆなごもた
そのまあるうらやましくかづぐのちみあまお
りぬあり。とくきさうめして、おきな女おならし
をぶふぬへなど。たゞ日ひと日さうらぶお事を志
ぬふどに大納言殿三位の中將松君もあてま
ありぬへり。殿い川しつぎさうり給ひて、ひざ
おもゑぬへり。いとさうつらし。せむきえんふ。所せ
きひの御さうぞくの下がさねをど。ひきちらさ
まてり。大納言殿も物々志うきさうげふ。中將殿ハ
らうくさう。いづきもめてさきを見奉る。小殿を

御わうごごなごハ、
伊周隆家さごの掾
み居たまへ。バ、田坐
をしくやうと。関
白殿のれごまふを
つふ。
おのやどりのハ、御
膳をれく所をいふ。
東宮の御使ハ、三条
院より御景舎への
御使者なり。

御返すやハ、関白殿
御返事を巨くと。御

はさるそのふてうへの御まぐせこそめめてけ
ま御わうごごなど聞えぬんど。らんまつき侍ら
んとていそぎさうらひぬ。志むり有て。式部のせ
うあみり。とさ御使よまあり。これた。おもの
やどりの北よりさう間よ。志とねさし。出てす
ゑり。御返ハ、うらちとく。いづさせぬひつまごご
とねもと。いねぬ。かど。小東宮の御使よ。ちうま
りの少將まあり。さうり。御文とり。いれて。わごどの
を。かきえん。されだ。ごあ。このえん。ふさ。とねさ
し。出り。御文とり。いれて。殿うへ宮さご。御らん
ど。わごも。御返す。やご。あまご。とみ。よ。も。き。さ。え

景舎よりわ給へども、耻らひてとみしつゝえかき給ひぬそつふ。
さぬ折云々ハ関白殿サレのあ給ハぬ折ハひまもなく淑景舎より御文まみらせ給ふ物をと道隆公のたはふれてのたまへるなり。
つゝまげハ淑景舎の耻給へるさまをりふ。

宮の御子たち云々ハ、松君をかやうふ

ぬもぬをふあづーが見侍れたまひきあゝぬか
んぬりさぬ折をまもあゝ是よりぞ聞えぬあ
ぢらるる申しぬへぢ御おきてハすろあゝ
なづろすろーうちろゝ急みぬへるいもめでぬ
しとくあどらんもきこえぬへバ、おぐゞはよむ
きてか、せぬあづへちのくよりぬひて、まろと
もあつせ奉り給へど、いとどはまゝげたり。
宮の御ろこより、まえぎのねり物の小うちきこ
うまろー出されれば、三位の中將あづけぬあ
らろーげぬおむひて、ちぬ松君のをろーう物
の給ふを、誰もくろつくろーがりきこえぬあ宮の

もてあつかふやう
ハ、皇后の皇子生れ
給ひてかくなりを
バと云意ありこれ
ハ正暦三年二月の
事、一一品宮敦康
親王さどと、いまご
生ささせ給ハぬ程
ひんぢたり。
延道まあるハ、一条
院の皇后の御方へ
入御のさまなり。

御子たちとて引出くろんふ、ろくハ侍らどか
しるどのぬをもるを、げふちどか、今までやう事
の、とぞ心もとるき、ひつどの時、バ、ろりふえんど
うまあろと、いふかどもあく、うちそよめき、いら
せぬへど、宮もこたし、ふよらせ給ひぬ、やづて御
帳ふろせぬひぬれど、女房南にきて、ふそよめ
き出ぬめり、らうふ殿上人いとおかろり、殿の御
まへも宮づろあゝて、ごごのけのなめさど、
人々急ハせるどおかせ、ろまろとふみな急ひ
て、女房と物いひろとすかど、ろこにをろーと
おむひろり、日の入やどに、たきこせぬひて、山井

山の井の大納言ハ
后宮伊周公平の
別腹の兄君道頼卿
をつふ此大納言道
隆公の御子なれど
公此君をばおぼさ
む伊周公をのみ取
たて、うつくし
給ひ、事、栄花物語
に見ゆ、これ世の
人ト、大殿の御心む
けよふとがひて、此
君をば、おとりさま
さいへるなまづ、
いり、うらハ、美隆云
傍近くなれむつお
をいひて、この如
くうけばかりて親し
からぬをいりた
ぬと云源氏野分巻
に御まゐりの程に
と童りていりたり

の大納言やいれて、みうちきまめくせぬひて、
かへらせぬ、櫻の御を、紅の御ぞの夕を
えむとも、か、これぞとめつ、山のぬれ大納
言、いり、ぬ御せうとよても、いとよくたを
せか、白ひやあなうら、此大納言もまを
りぬ、うらものを世の人とせし、よいおとしき
こゆるこそいと、か、殿大納言、やまのぬり
大納言、三位の中將、内藏頭、ふとみる、あづきひ給
ふ宮のぼくせぬ、ふべき御使、うまの内侍の
すけまぬりぬ、こゝひいえる、とまづ、せ給
ふを、殿きうせ給ひて、いとあるまじき事、ぬの

なれきこえ給へば
とあるまじき考
あべ、
内藏頭ハ是道隆
公の御子、て、親
の内藏頭と藤氏系
圖あり、
うまの内侍のせけ
ハ、左馬権頭時明の
女なり、
まづさハ、さあ
バ先淑景舎をまゐ
らせて後、まゐり
給ふんと、皇后の
たまふをいふ

がらせぬへと申させ給ふよ、又春宮の御つうひ
あきりふある程、いとほし、御むうへふ女房
春宮のまどもまゐりて、とくとそののうきこ
ゆまづさむ、かの君わ、きこえぬひて、ぬの
まをせられ、ざりともい、うと、を、猶見
くりきこえん、どののさまを、いとを、この
うめ、を、遠きを、さきふとて、まづ志
げい、やわ、り給ひて、殿さど、か、らせぬひて
ぞの、がらせぬ、道の、ぬも、殿の、御、ら、ぬ、こと、に
い、と、く、わ、ら、ひ、て、な、ら、く、う、ち、さ、し、より、も、ね、ち
ぬべ、

こと人よきせむや
ハ下藝の色などの
よきが方弘よハ似
合むと人々のあふ
りていふあり。
里よとのみ物とり
よハ方弘殿上よ宿
直して我里よ夜の
物とりよやるるる
べし。
何でふ事とハ何事
とハさうねど唯笑
ひこりとるり。

此殿上の云々ハ彼
返事かんとて墨
筆のをけねばたづ
ぬとてかきいふ
なるべし。
女院ハ一条院の御

母東三条女院より
御使よハ官の御方
よりの御見舞の使
よ方弘がゆきし也

我君こそそのこそハ
かゝり詞のこそよ
あらず人をよぶ時
よつけていふ詞也
むくろごめハ軀籠
よて全身皆こそこ
へより給へとるり。
除目ハ三夜おこる
はるゝ故其中の夜
也。
うちよきハ燈臺の

こと人よきせむやなどいふよ。ぐふぞ詞づらひ
などのあやしき里よとのみ物とりよやるふ男
二人まのれといふふひとりきてとりたまのり
ふんものをといふふあやしの男や一人きつてふ
たりのねをばいぐでまのいへきぞひとまをさ
めふ。二ますもいるやといふを。あでふ事と忘る
人もあけまどい。うわらふ。人の使のきつて。御
返事とくといふを。あやしく此男や。かまどに豆
やくべとふ。此殿上のきみ筆も。何もねもみ
かくしたるぞ。いひさげあふ。まを。かきうまて
人のねもまめといふを。又わらふ。女院なやませ

給ふとて御使ふまありてかへりつるふみんの
殿上人ハ。うれくう何りつると人のとへど。それ
みれおど四五人をのりいふよ。又もととへむさ
て。いぬるくどもぞありつるといふを。まを。わ
らふも。又あやしき事ふこそいあ。め。ひとまよ
よりきてわが君こそ。まの物きこそえんま。い。く
のねへつる事ぞといふ。何事よ。のとして。き。ち。や
うのも。と。よ。より。これ。むくろごめ。よ。より。ぬ
といふを。五つ。い。ご。め。ふ。と。あ。ん。い。ひ。つ。つ。と。い。ひ
て。又。わ。ら。ふ。ぢ。む。く。の。中。の。夜。さ。あ。ぶ。ら。せ。る。ふ。
とう。ご。い。の。う。ち。よ。き。を。ふ。み。て。こ。て。ま。ふ。あ。う。ら

枕
巻
三

下ましく物則油單をいふ。

志たうづ和名抄は襪和名之太久頭足衣也とあり。頭つき給ハぬなど云々藏人頭ハ貫首とて殿上の管領なれハ基盤よつきて食むる時も頭のつかざるハ殿上人誰もつかぬを方弘ハ頭よりさきよ豆をらひしとあり。

逢坂ハ近江をまハ摂津鈴鹿ハ伊勢くき田白河衣とありハ共ハ奥州なり。

志きゆらんあれどつらうとらふらふりさしあゆみてかへれどやうてとらうといそふれぬ志とらうづもうち志きふつきてゆくふまこと小道こそ志んどらうとらうか頭つきぬハぬ不どと殿上の大ぢんふ人もはらひぞそまふまをひるも豆一丸りをとりてこはうじのうらふてやをうくひくれバびきけうかしてわらさる事ぞかぎりあきや。

せきと 八十八段

あふらのせき。ままの関。すぐめのせき。くきとの関。あら川のせき。衣の関。たぐこ

たぐここの関ハ詳がらす。

よこらり清見共ハ駿河みるめハ近江なり。いひ思ひかへしハ思ひまはる事と又由なりと思ひ返しこらやうなれバなり。

足がらハ相模なり。

大荒木山城あり志のびの森ハ雲志のびの森陸奥ありと是をかきたがへしや。こくハ伊豆木枯

えのせきハたぐりのせきとふとしへまこそおらゆれ。よこらりの関。きよこのせき。見るめの関。よらりの関こそいこのふたむひ返しつらなるといともまほしけれそまをたそその関といひふよあらんあふ坂かどをまぐ思ひ返しつらわびつらんとし。是づらの関。

そりハ 八十九段

おらあらしきの森。志のびの森。こらひの森。こづらしれ森。志のびの森。いくたの森。うつきこの森。きくこの森。いとせの森。立聞の

ハ駿河志のこハ和泉生田ハ摂津いはセハ大和常磐ハ山城神なびハ摂津浮田いは田ハ共ハ山城なり。かうだてハ加茂ふ神館の杜ありもしくハそこかと濱臣の考あり。

淀のわたりいふへも橋をくつて舟をりせしなり。

森。ときこの森。くらぶききの森。神なびの森。うきこの森。うき木の森。いしこの森。かうごての森といふがみ、とどまらざるそ、何れもりさどいふべくもあらむ。つひと木あるを。何ふつけたるぞ。こひの森。こころは森。

淀のわたり 九十段

卯月廿晦日ふもせ寺ふまうづとて。淀のわたりといふものをせしうら。舟よ車をかきもゑてゆくふ。やうぶことまどりのまらどく見えしを。とせしれ。いとまどりのうらける。こもはこころ

高瀬の波河内もあり。六帖よこも枕高瀬の波よ。かろくとの。かろくも我ハる。でこのまん。三日といふまハ初瀬詣で。三日り。かつろなり。

なつくりハ信濃有馬を揚津ふあり。五造ハ評なり。

物の音。是も曉の管結ハ常よりこくにまこゆしなり。

ふねのあまきしこそ。いみじうをうかり。あふのせのよどふと。これをよみうらなめりと見え。三日といふよ。帰るふ雨のいも。う降のバ。てうぶらとて。笠のいとちひさきをきて。ハぎいと高きをのこわら。あるどのあも。屏風の忍ふいとよくふなり。

湯ハ 九十一段

なつくりれゆ。有馬のゆ。玉つくりの湯。常よりまらふき。ゆる物 九十二段。元三の車のおと。鳥の声。曉の志もぶき。物のねハ。なり。

物語云々源氏桐壺は繪は書たる楊貴妃の如くちいみどり繪師といつども筆限あればいと句なしとあるもこの趣も同じ。

かきまへりたる物云々繪も書まへり詞も書まへり意は松の木より鹿までハ画はかきまへりし冬はいみじく以下ハ詞はかきまへる物なりと抄に見ゆ。

曉のぬりの額突よて曉は御嶽精進したる人の弥勒を礼拜するをいつか。

繪ふかきてたぐる物 九十三段
なごしこ。ほくら。山吹。物ごりよめでと
しといひたるをそこ女のうごち。

かきまへりたるもの 九十四段
松の木。秋の野。山ざと。山路。鶴。鹿。冬
はいみじくはむき。夏ハ世ふさくむ暑き。

あまれなる物 九十五段
孝あまれの子。鹿のね。よき男のわりきごみ
だけさうと志ふる。つごてめてうちおこるひと
あまれきまのぬのなごいさううはれなる。む
つまじき入るどのめさまへてきくくんねむ

めさまへてハ彼礼拜の声を物隔て、聞て想像をよも哀なりとなり。
まうづる程ハ十日精進して金峯山へ詣づる程をいつか。よぼりし云々ハ久しき山ふみし鳥帽子の損じころを云。信賢ハ六條左大臣重信公の息宣方をうべし。

必しもあしめてよと云金峯山の蔵王も必あしやつれてまわれよとハよものなまけド也。隆光ハ三条右大臣定方より五代左衛門佐宣方の息なり。

やりまうづるなどのありさまいうあんとつ
ほりみるふたひらうかまうでつきたるを
いとめでつけま。魚けうのさまなごぞま
し人わろきなわいさうき人ときこゆれどこよ
るくやはれてまうげとこそいありたるふ。右衛
門のまけ信賢ハあぢきなき事あり。つごきよき
衣をきてまうでんふなごふことかいらんのか
らずよもあしめてよと。さうけのつまはんとて
三月つごなりむらさきのいとこきさうぬき
志ろきあをやまぶまのいみじくおどろくとき
などみて。つごのみつがとのまけをけさうハあ

うちつゞまき信賢
ようちつゞまきなり
あやしき事いやつ
れを清げらち出立
をあやしむるなり

なりみーハ信賢筑
前の守の後任よる
りしとなり

あまのなきかよ云
々西行の歌よ蒼夜
寒も秋のなるまよ
よよわろかこゑの

をいろ紅のきぬをりもどろか〜するすいりん
むのまおてうちつゞまきまうで〜りけるふ帰る
人もまうづる人もめづら〜あやしき事に
べて此山道ふ〜るすすぐ〜此人見えざりはと
あさま〜あり〜を四月晦日おか〜りて六月十
餘日の不どお筑前のか〜うせお〜かとりにな
アお〜こそげふいひらんふ〜おいざもときこ
え〜は哀ある事おもあ〜ねどもみさけの
はいで也。九月三十日十月一日の不どお只あ
まのなきさうふき〜つけ〜るま〜りぐ〜すのこゑ
ふもとりの子いごきて〜る。秋あ〜のき

と不づりりゆく
川竹の云々抄よ夕
暮よて句曉〜り別
の事なりとあねど
よぶてハタぐまよ
曉と夜と三〜な〜
河竹の音のあそれ
なちをりふとの演
臣の考のち〜らし
かるべし。

年亦過し〜ハ年
の老よき〜るを云
朗詠集ふ香火一炉
灯一盞白頭夜礼佛
名經云々とあり

庭のあ〜ぢふ露のいろく玉のやうみてひ〜り
〜。川竹の風あ〜つれ〜るゆふぐまあ〜のつ
きふめさま〜る。夜あどもをべて。ねひひか
〜〜るわのきんの中ふせ〜く〜あ〜て心ふ
し〜まのせぬ。山里は雪。男も女もきよげな
る〜るろきなき〜る。二十六七日を〜りの何
〜つきふ物ぐ〜り〜ておあ〜〜て見ね〜ある
うあま〜りに心がそげなる月の山のち〜り〜見
え〜るこそいとあ〜れなき。秋の野。年うち
す〜〜る僧〜ちのね〜るひ〜る。あれ〜
〜家ふ〜る〜ひ〜る〜よ〜も〜た〜る〜お

くまろくまろのト
まの字はまのま
まべーと夏度い
り

つみまなくハサ
しも恐るゝさまな
く危き事もあるな
どりの意なり。

ひたす庭ふ月のくまろくあつきい
いあらぬ風の吹く。

初瀬詣 九十六段

正月小寺ふこころいりるハいみどく寒く雪が
は氷りふるらそをのしくれ雨をどのふりぬ
きくきあるいといわろしそらせるどふま
でいばがねをどするおどをられまのとも
車引よせしそるふおひどりさつるわの法
師どりのあしつ物をもきていさつ
はともたつおりのがるとして何ともあき経の
しうちよみ俱舎のぶゆをいひつげあ

わののぼるハ清少
たちのれびを云
かうらんおさへて
ハ高欄は取つきて
なり。
たハ板敷などのや
らよハ彼法師原の
やまゆくはまを
みていつなり。
きぬかへまよ云
々の外の参詣の人
々のさまなり。
はうくわハ半靴よ
て深履の頭の短き
おむをいふ。
うちわいりめきて
ハ禁中のやうよ
の意なり。
うちとなど云ハ
内外を許されて親
しく出入をよめ
ことよを云。

いこころを呼ぶつけてをのしくれわがのぶら
いとあゆふかかそふよりてかうらんは
してゆくものを只板敷きまどのやうに思ひ
るもをのしつがねさつりまどいひてくつど
むてまておろまをぬりいふまひまか
どーもあや裳からぎぬおどこむくさ
うぞきたるもありふらぶらうらわおどを
てらうのふどなどくつさつりいさうちわい
めきて又をのしつらとあどゆるさつれらる
男ども家の子など又立はまきてそこむとい
ちる所お侍るありあがりさるおどをいゆ

そのことハ云々道
の高下の案内を
詞にてそこいひく
き所をり。たうき一
なりをいをしよう
をりふ。
まげハハの若き
男家のふるどの判
とて細る。

まぐ心も其尊きさ
まを見るより先信
仰の心の起るを云
うちハ内陣ハ他
所の人の奉りし燈
明のたえこなる。
ふみをさげハ御
燈文をさべし源氏

く何れおふりあらんいとちうくさうあゆみさ
いづらものかどを志づ一人のたうますふか
くさまドラぬわごなりあどつふをげふとてを
こ立たくるもあり又きつもいれむ我まづ
とく佛の御まふとゆるもあつねおせく
ふども人のあなみたるまへをほりゆげだ
とうこてあるふ犬ふせぎれ中を見いれさる心
ちいみどくふとくなどて月比もまうでむ過
しつんとてまづ心もおこさるみあう常灯
ふハあうでうちふ又人の奉りするねそるき
までもえたるふ佛のきらくと見えぬるいみ

玉かづらの巻初
瀬よみあかし文
の事あり。
ろぎちかふ抄論
義誓ふよやとあり。
濱臣ハ一本ふり。
礼版に向ひ手廣き
ちかふて手を廣
ぐる事をらんうと
いへり。
なまがしの御為ハ
それぐの立願のこ
めとなり。

法師よりきて云々
ハ願文よみし法師
の清少のむとふよ
りきて所願の趣を
よく佛に申しこり
なごつふをいふ。

ちうたふとげふてごとふふみをさうげてらい
むんふむりひてろぎちうふもほむりゆむり
みちてこれもとらりたまらて聞わくべくもあ
らぬおせめて志づり出しさる声々のほよのふ
又まぎれず千さうの御心ぎハなまおのの御
ふあとわづあふきさゆたびうちうけてをうと奉
るふつにわうさぶらふといひて志きみの杖を
をりてとてきたるあどのふときあども猶を
かし犬ふせぎのうさより法師よりきていとよ
く申侍ぬいくあむりこもらせぬあづきなど
とふ志のぐの人らむらせぬへりふといひきか

枕草子 卷三

林 貞 巻 三

あつゝの人。是も法師の。我もとよこかり。おんまゝ人の名。まど。語りきかせ。てかへる。まゝまゝ。もてきつゝ。清少の局へ。宿坊よりも。てきてかすを。御供の人云々。堂よての清少の局狭。られ。供の人々。宿坊へと誘ふ。云。我なり。我よ。しむる祈禱の鐘の音なり。ときくを云。

高く打出させ。彼男の。思ひ。や。よ。ぬ。

せて。いぬ。ま。ま。いち。火をけ。ぐ。物。あ。ど。も。て。ま。は。か。す。ら。ん。ご。ふ。ま。手。水。あ。ど。い。ま。て。ご。う。ひ。れ。手。も。た。ま。ま。ど。あり。御。も。の。人。の。坊。あ。な。ど。い。ひ。て。よ。び。も。て。ゆ。け。む。か。り。く。ど。ゆ。く。ず。ぎ。や。う。の。う。ね。の。ね。と。我。ま。な。り。と。き。け。ば。ご。の。ま。ま。き。ろ。ゆ。か。さ。り。ふ。よ。ろ。き。男。の。い。と。恐。び。や。り。ふ。ぬ。の。あ。ど。は。く。た。ち。お。の。不。ど。も。心。あ。く。ん。と。聞。え。た。ら。の。い。う。く。思。ひ。入。た。る。け。し。き。ふ。て。い。を。ね。ず。た。ら。な。ふ。こ。そ。い。と。あ。ら。れ。あ。ま。う。ち。や。ま。む。む。ど。ハ。經。高。く。い。ま。き。こ。え。ぬ。ち。ど。ふ。う。く。た。る。も。ご。ふ。と。げ。た。ら。た。う。う。ち。出。さ。せ。ま。る。き。ふ。ま。し。て。は。

か。を。つ。き。徑。を。も。高。から。ず。よ。む。を。ま。う。く。詞。も。出。さ。せ。ま。は。し。と。り。か。れ。を。か。う。ん。ど。や。い。其。ま。の。殊。勝。る。う。を。見。て。彼。男。の。所。願。を。成。就。せ。せ。ま。は。し。と。思。ふ。を。云。は。や。う。い。有。り。し。ハ。茶。の。は。く。を。お。も。が。し。と。り。見。を。い。く。を。い。く。昔。ハ。時。を。し。ら。は。し。ま。し。貝。を。吹。し。ら。り。千。載。ま。ま。げ。ふ。も。又。半。の。貝。を。吹。つ。ら。れ。ひ。つ。の。あ。ゆ。い。近。づ。き。ぬ。し。堂。事。子。の。法。會。の。時。に。盆。を。お。こ。ま。ひ。を。

か。う。ど。を。げ。ざ。や。り。ふ。き。う。ふ。く。ハ。あ。ら。で。せ。こ。し。思。び。て。か。こ。う。と。何。事。を。お。も。ふ。ら。ん。う。ね。を。か。あ。へ。ど。ね。と。こ。そ。た。不。ゆ。れ。日。比。こ。ま。り。ご。う。ふ。晝。ハ。ま。ま。の。ど。う。み。ぞ。を。や。う。ハ。有。し。法。師。の。坊。ふ。を。の。こ。ど。も。わ。ら。さ。る。ま。ど。ゆ。き。て。つ。ま。ぐ。あ。る。ふ。い。づ。か。こ。も。も。見。を。い。と。く。く。俄。ふ。ふ。き。出。し。こ。う。こ。そ。お。ど。ろ。う。ら。れ。き。い。ま。げ。あ。ら。う。て。又。な。ど。持。せ。し。ら。男。の。ま。ま。や。う。の。物。う。ら。れ。き。て。ご。う。童。子。ご。ど。よ。ぶ。こ。急。ハ。山。ひ。き。あ。ひ。て。ま。ま。り。き。こ。ゆ。う。ね。れ。色。ひ。き。ま。ま。り。て。い。づ。こ。あ。ら。ん。と。き。く。ら。ど。ふ。や。ん。ご。と。あ。き。お。の。名。う。ち。い。ひ。

七 龍 氏 卷 三

其寺の佛經ハた
へハ初瀬くハ親
吾經うづまふ
ハ樂師徑のたぐひ
あり。

けふりたるハひ
らぐりハひり。

童らとてハ童ふ
とけらハ童ふ

いねうハ童ハ
は童うハ童ハ
指貫きたる侍ど
もねちめぐる貴と
みゆきたる童也

ぬるもみよ其寺の佛經をいといひらくあうた
うくうら出てふみたるにわがとくふとくとも
あふずがとくやうぶちくる法師のよむるあ
りともふとうら驚かれてわとまふきこゆ又よる
うどハうほあらで人々あき人のおころひける
ぶあをふびのはいぬきれもこびりける白き衣
ども何まこきて子どもありといんゆる若きを
のこれをつりり打さうぞきけるわらとさうごし
てさうがらひの者どもあすこがこさういねう
あくるもそのしがかりそのあふ屏風たてぬかふ
どもとくつくりめりがあふぬハ誰たらんとい

つげねとて云ハ
女房の局の辺を立
つまよひのいさま
とすこまを云

えせ者云ハハ浅
ま若人とハ見えす
いかさまに写さ放
有げまりとさう
櫻ハ表白裏赤花柳
ハ表白裏青さう

つきくハ若
くよき年頃ハ若
うきさうよ
餅食ハも鷹狩あ
どよ用ひハものさ
るを此けより菓子

かやうしありさうハさなめりともんもさうし
わつさくんどもハさうくはねねるさうどのわさ
りよさうまひて佛の御うさあめんやり奉らざ
別當あどびてうちさくめき物語志て出ぬる
えせものといえんえぞかハ二月廿日二月朔日ど
ろ花ざのりみこなりたるもさうきまげふる
そのこども忍ぶといゆる二三人櫻青柳さど
そのしうてらアあげたるさうねきれとそも
めてやのふこささるはまきぐあきさそのこふ
さうぞくさうさうさうさうさうさうさうさう
ことわりわらハどもさうさうさうさうさうさうさ

まろくれば古平の
うらて改む。
秋あけりの文つと
むつりしうら心
をとめて見まき
らり。
又あけりとい女が
れやげりしとみ
限りし男は達へ
らり。
まづのうらあ
ぬいさやうふ情も
あぬ男まふ細か
しき事もあると也
いみじく氣以下
女は討して薄情な
る男のうらまをい
らり。
たゞのうらあは云
いのかめ字任人の
懐妊せしるも情な
く見すつらきを云。

哀ふ心も一げよ見捨ぐさき事らどをい
何事とも思ひぬもいのさる心ぞとこそいあ
まのうられさもがふ人の上をばもどき物をい
とよくいふよことみこのもき人もうら宮つ
りつの人らどをうらひてたがふもあらど
たもありうらまらどをうらみぬるよ。

むとくらる物 百一段

汐干のかさるる大きるる舟。かみ短うき人の。
かづららうららして髪ららる程。大きなる木
れ風よ吹くふされて根をまきげてよこさのい
ふせる。相撲のまけていううしろ手。えせ者

むとくはせんうき
さまあしきうら
きるとつらま也。
かつらひかまどと
いふものなり。
さげてはうらあ
げてまつりや也。
うら手は手の事
のみをいへるよあ
らざうしろつきの
えせ者。
えせ者ハ威勢もある
き主人をいふま
ハ後者も云。
物まんじハ物悲し
りて嫉妬も云云
からまうらハ女の
家出してつらこへ
う隠れらるま云。
こまのぬしくハ猫
ハ獅子の誤らうべ
しと美隆いへり。

のびどかんぐある。翁のともぐりたるまら
人のめらどめずらるる物魚んじあてかく
れらるるを必舞ねさるぐん物をと思ひしるま
しも思ひたららねさげよもてさるらるま
もえ振どもあらねさ心といでまらる。こま
いぬまらさやまのにおもららるらやま出てを
どる足音。

修法 百二段

修法を佛眼真言をどよみこてまつらるま
めらうらららら。

えらるまきもの 百三段

室のくま殿は道隆公の弟道長公を云。そのはは道長公は少しあゆみ出させは道隆公のあり。猶いかかり云くハ赤世の善業うてかくんくは尊敬せられ給ふまやと也。かくりてたしと見る事の重なりこころと大渡通長公傳まいとよく似たり而あり。忌の日ハ斎日と云六斎日ハ殺生をたつ事拾芥抄よみゆ。たゞ其すゝとけハ其珠敷を暫し給はれとあり。

つくろひやもらハせぬふ宮の太夫殿の清涼殿のまふあつせぬれバそれハあさせぬふサドきさありと見る程ふとくあゆみおさせぬバふとあさせぬひしこそ猶いあむりの昔此御ねくまひのほどさうんと見奉りしこそいどくりりハ中納言の君の忌の日とてさししがりおこなひぬひしとく其どくあむりおこなひてめぐいさ身ふるんとかとてあつまりてわらへど猶いとこそめでたけれ御まふまきこつめして佛ふるりくらんこそ是よりいまさらめとてお急ませぬくふふ又ちぐこつさり

おまふハ皇后と云思ふ人ハいつもあやうき事と感じ思ふ人とさうとあやみゆ。

九月のつり云かゝる事も見えたり何れぬみまゝの筆すさひされといもめてこき文あり。すいかいハ遠近を吾復よつくる也。一不すいかいのとの文字ある事あり。らんハ蘭文乱文

てぞ見すあらする太夫殿のあさせぬへるをかつもくまきこゆれば例の思ふ人とわらさせ給ふまうて此後此御あまよ見奉らせぬハやうバこつりとおびりめされまう。

あゝたの露 百五段

九月のつり夜つよありあつり雨のげさハやみて朝日の花やりふほくさふせんぞぬの菊は露こぶるバくりぬれくさくさむいとをうすいがいらんすくまきなどのうへよかいさるくとのすれこぶれのつりておふ系もこえぞまふ雨れくさるがさるまき玉をつらぬ

るどかきて遠近の
かやうの形し
たるを云抄よ
羅文薄也と注せら
れらるわらうと
夏澄いへり。
おもげなりつらよ
のよ文字一本なり。
ふとかみままへハ
露よりたるか露
のこられこれいふ
とおきあかさを云

とみよハ早速す

きつるやうなるらそいみどらうあそれふをう
くれすうー目くけぬまば萩るどのいとおまげ
まりつるよ露のおつるよ枝のうらうらうまいて人
まふれぬふふとかみままへあぐりたるいみ
ぢういとさうーといひらうここの人のここのみ
いほゆきさうーつらうとあまふこもまふさうー
れ。

耳ふ草 百六段

七日のわらまさを人の六日ふもてはらまふら
らしるどするみ見もさうぬまさをまふものもて
きたるを何とくられをまふらうとくんとくんとく

ぐさまふどのま也
いさるどを柳ま溜
りていざ見給へと
くをさそひ佳す
心なりとあまいわ
るしいや知りませ
ぬまど云てさて後
よ一人の耳ふ草と
まふらうといひ
ま。

もいさるどいさるどこれかれ見あはせてみふ
草とまふらうとくふ者のあままふらうまふらう
まうぬ顔するはらうと笑ふよ又まうらうげある菊
の生らうまをまてまふれま。

定考 釋奠 百七段

二月官のはらうとみかうらやうといふことする
ハ何事にあらうん釋奠もいかにあらうん孔子らうどハ
りけ奉りてする事らうまふらうとくうわいとてうへ

頼ひて官壽を給ふ
をりふ。
秋奠ハ二月上の丁
の日孔子をまつる
をりふ。
聰明ハ秋奠の折の
昨夕ハ行成卿より
頭弁ハ行成卿より
梅の花の云々昔ハ
かゝる物をおく
ふ皆本章の花を
よつけり。
へいたんハ候談と
かきて裏條の中ハ
鵝鴨などの子雜菜
等をりれ煮合せて
四方よきりくる物
なり。
けせん濱江云扱の
花文の院ハ解文ハ
文をりへし解文ハ
今ハ頼書の如く

まもろやよもあやまきものさどかりけりも
りてまゐるも。

みまなれ成行 百八段

頭弁の御もとよりとてとのもづうと繪さどや
うるる物を忘らきまきふつみみて梅の花の
いみづく嘆るにつけてもてきたり畫るやあ
らんと急ぎ取いれて見きバへいざんとつみ物
を二川まづべてつはみさる也くりそくさるた
てよよげもんのやうみりきて進上へいざん一
つみ例みりて進上如件少納言殿ふとて月
日かきてみまなれなりゆきとておくに姑その

諸司より諸者へか
きあげさす下書
より其書法目録の
書法ハ似たり。
みまれのさうゆき
ハ行成々のつり
名をり。

惟仲ハ権中納言時
武の子在中舟中宮
大夫より。
うるさうてハ惟
仲皇后のせ給へ

こハまづのらまゐらんとさるるをひるハかち
わる一とてすあらぬ也といみづくさうげふ
うきぬひより御前ふまありて御らんせまをれ
ばりてさくもかかれらるるさうさうさう
さどがめさせぬひて御文ハとらせまひつ
り事ハいづくもべうらん然へいざんもて
るふそ拍らどやとらすらんかきくもがれと
いふさきさうめしてこれふる声つらよび
てとくどのさまをすれづらにわてた大弁ふ
物まきえんとさぶらひ志ていとすれをいとよ
くうるさうてまきさうあらずわさうさう也

月秋と期してハ昔
三品の句は南極殿
月之人月與秋期而
身何去とあり朗詠
集本朝文粹等よ
れり。
おけすす不ハ皇
后の御坐を参りて
秋詠吟の事いん
とてなり。

わざと以下秋信と
清少との中の事と
いへり也。

み詩ぢんじもどもろふ頭中將ののぶれ君月
秋ときして身いづくにうとしふ事をうらあ
ぬらうしうバいみどうめでさういづでうとお
もいいでぬひけんおいらます不よわけやある
不どもま出さやぬひてめでさうあひみどうけ
うの事にいひくる事にくそ何れとのぬをもれ
ばそれを啓ふとて物も見さしてまあり侍り
つる也。寝いとめでさうこそ思ひ侍れときこそ
さすまばさうてさおがゆるんとたかせさう
わざとよひもいぞたのづかう何れも不よそハ
どこのあつをよほふちうくハ語らひぬをぬさす

とくハ得えうと
俗さうみとそ
因ドさうハハハ語
らう中をさうり。

やくしハ秋信を
むすを後として
たさう奉むるを

がよよらうさう思ひいんまよのいあさうと
りさうさういとあおさうさうさうら年ごらふ
成ぬるといこのうとてやむとあ殿よるど
ふあけくれさうさうあらバ何事さう思ひ出
ふせんとのぬくバさうさうさうさうさう
もらぬさうさうさう後ふいえ不め奉らさ
んが口さうさうさうの御事さうさうさう
あつまうて不めさうさうさういのでうさう
せうさうさうさうさう心の鬼いできていひ
く侍りさう物さうさうさうさうさうさう
さうさうさうさうさうさうさうさうさう

うゝひきいさ引ふ
て。筆花物語歌合巻
よ。借ききい。ちろや
のみう。心持。君も
うゝひく。心有けり
とある。よ。同じ。後み
ひいき。し。つ。詞あ
ら。此。ひき。その。べ
い。つ。る。り。

以年のを。行成に
中官職。清少と
物語。給ひ。する。
り。と。ふ。け。ぬ。い。
う。ふ。け。ぬ。の。誤。款。と
美。隆。い。へ。り。
かう。や。紙。北。野。の
紙。屋。川。まで。と。き。し
紙。き。つ。ふ。

このぬふ。それ。ぶ。く。う。ず。い。こ。そ。あ。い。め。男。も
女。も。げ。ら。う。き。く。を。う。ひ。き。思。ふ。人。の。ら。い。あ。
あ。し。き。事。を。い。つ。が。腹。ぶ。ち。ま。さ。ま。ぶ。わ。び。あ。う。
ね。ぶ。ゆる。ま。り。し。く。い。づ。の。も。げ。ま。う。こ。も。あ。
とのぬ。あ。ま。さ。い。つ。

鳥のそらね 百十一段

頭。兵。乃。志。き。ふ。ま。あ。り。ゆ。ひ。て。物。づ。う。ま。ど。と。の
ふ。ふ。夜。い。と。ふ。ら。ぬ。あ。す。御。物。忘。る。ふ。こ。も。あ。べ
り。ぬ。ひ。ね。ば。と。め。て。蔵。へ。ふ。の。か。う。や。紙。ひ。き。あ。さ
ね。て。後。の。あ。い。の。こ。う。お。ほ。る。心。地。る。ん。す

催。不。さ。れ。て。ハ。鶴。小
い。と。れ。て。早。い。か
ま。出。し。と。る。り。

孟。嘗。君。の。う。や。ハ。序
と。さ。つ。そ。ま。ま。ま。ま
と。さ。ら。ぬ。鳥。を。鳴。か
せ。給。へ。り。か。と。る。り。
こ。ハ。史。記。日。孟。嘗。君。
秦王。よ。と。ら。ハ。れ。の
し。よ。夜。う。ま。ま。れ。通
れ。時。函。谷。の。関。雞
の。鳴。ぬ。眼。ハ。く。を。通
さ。す。然。る。孟。嘗。君。
の。三。千。の。客。の。中。よ。
鶏。明。と。て。鶏。の。真。似
を。う。く。は。る。者。す。ね
を。さ。け。れ。誠。の。鳥

よ。夜。さ。と。ほ。い。昔。物。語。も。ま。ま。こ。と。あ。い。ん。と。せ
し。を。鳥。の。声。も。も。ふ。ふ。さ。れ。て。と。い。い。と。い。ふ。う。き
よ。げ。ふ。う。ら。う。つ。ふ。こ。も。お。わ。い。か。ま。い。ぬ。く。ま。い。と
あ。で。い。御。か。し。り。ふ。い。と。夜。あ。の。い。待。り。け。ら。あ
れ。い。ま。い。ま。う。う。う。く。ん。の。ふ。あ。ま。ま。い。こ。え。た。れ。ば。
い。ま。う。り。ま。う。う。う。う。く。ん。の。ふ。い。と。ら。い。ハ。か。ん。こ
く。ら。と。ん。を。ひ。ら。き。て。ご。ち。の。う。く。わ。づ。う。み。さ。れ
り。と。い。ふ。ハ。達。坂。の。関。の。事。ま。り。と。い。れ。ば。
夜。を。こ。めて。鳥。の。そ。ら。ね。い。ま。の。う。と。も。
世。よ。あ。あ。さ。ら。乃。せ。き。ハ。ゆる。さ。づ。
心。か。こ。き。関。と。り。侍。る。わ。り。と。き。こ。ゆ。い。ち。ら。か。う

も。鳴て深夜は関を
明て通しつとあ
う。故事より。
心くこきこいハ
達はの関ハ。函谷関
といらむひ賢き関
守の侍れは。ハハ
らう。事侍らしと
るり。
僧の君ハ。隆縁僧
都也。
ぬのをさへつきて
ハ。類を定むかみて
念聖のさするり。
清布よ。のて。一本
よるり。
さて其又云ハ。行
成卿の清少の文の
事といはれ。詞也。
まこと云云ハ。清
少の答うり。く事
も。うらうへ。よん

り。
あふさか。い人こえや。はを関されバ
鳥とさうね。どあけてやうらう
とありし文ども。をぞ。めめハ。僧の君れぬ。の
をさへ。はきて。とりぬ。ひて。きの。ちく。のハ。御ま
つ。ふて。さて。あふさう。れ。歌。よ。み。つ。た。れ。て。か
し。ぬ。せず。成。ふ。くる。いと。わる。と。笑。い。せ。ぬ。ふ。さ
て。其。文。ハ。殿。上。人。みる。見。て。ハ。と。の。た。ま。へ。ハ。ま
こと。に。お。び。く。り。と。さ。これ。よ。て。こそ。さ。り。ぬ。れ。
め。で。た。き。事。を。人。の。い。ひ。つ。つ。へ。ぬ。ハ。う。ひ。る。ま。わ
ぞ。ぞ。う。し。又。見。ぶ。る。ハ。れ。ハ。御。文。ハ。い。み。じ。く。隠

る詞つら。ハ。ホの時
鳥。聞。ま。行。し。條。よ。
み。え。く。
思。ひ。く。ま。さ。ハ。思
ひ。や。り。ま。の。ま。也。

いくよ。心。う。く。ん
又。見。せ。る。ハ。い。く。よ
憂。く。つ。う。ら。ま。し
と。る。り。

して。人。よ。つ。ゆ。見。せ。侍。ら。ぬ。心。ぞ。の。不。ど。を。くら
ぶ。ふ。ひ。く。う。こ。そ。い。と。い。く。ハ。か。り。物。思。ひ。ま
り。て。つ。よ。こ。そ。猶。く。よ。ハ。似。ど。思。い。ど。思。ひ。く。ま
あ。く。わ。う。ま。さ。り。さ。ど。例。の。女。の。や。う。ふ。い。ま。ん
と。こ。そ。思。ひ。つ。う。ふ。と。て。い。み。ど。う。笑。ひ。給。ふ。ハ
な。ど。よ。ろ。こ。び。を。こ。そ。聞。え。め。さ。ど。つ。よ。ま。あ。が。文
を。か。ら。し。ぬ。ひ。ける。又。猶。う。れ。き。事。さ。り。い。う。ふ
心。う。く。つ。ら。の。う。ま。し。今。より。も。猶。か。み。き。こ。え。ん
さ。ど。の。ぬ。ひ。て。後。ふ。つ。ね。あ。さ。の。中。將。頭。糸。ハ。い。み
こ。う。か。め。ぬ。よ。と。い。ま。り。こ。り。や。一。日。の。文。の。は。い
で。に。あ。ま。し。事。さ。る。ど。か。い。り。ぬ。ふ。思。ふ。く。の。不。め

らるゝハ。いみじううれしくさだすわやうみの
のよもさう。嬉しき事よこつてこそうのほ
め給ふなるホ。又思ふ人の中侍りくらをささとい
つバ。それらぢぢう。いまの事れやうもよ
ろこび給ふくまとのたやう。

このきみ 百十二段

出て見よ云々ハ皇
后の御詞あり
そららハ。簾よこハ
りて竹のまき世。

五月むうり小月をさくいとく。き夜女房や
がらひゆふとこ急く。とていづバ。出てこられ
いさづいふハ誰そとおかせらるれむ。出てこ
ハ。そおどろく。あまきいやうなるハ。といふ
ふ物もいもでみとをむ。びてそよらとさう。

此君ハ竹の一名よ
て。昔の王子猷の竹
を愛して。何可一日
無此君といひ。故
事あり。

お糸の竹ハ。仁孝殿
のまんの竹さうん
し。

誰り教えハ。清め
ハ誰は習ひて。さ
ての人の知れぬ名
を知らざるあり。

誠ぞえ知らじハ。改
糸のふふれのと

うらわれ竹の枝をりけり。おい。此君ふこそと
いひ。さるをきいて。いづ如これ殿よ。よゆきて。の
たらんとて。中將新中將。六位どもるど有るハ。
いぬ。頭糸をとまうのひて。あやま。いぬる者ど
もか。なまうの竹をさうりて。奇く。うんとさつ
を。職よ。ありて。ねる。ぐくハ。女房さど。よび。出て
を。と。つひて。きつる。を。ら。れ。竹。の。名。を。い。と。と。い
ま。れ。て。い。ぬ。う。ら。を。さ。う。ら。れ。ふ。れ。が。を。一。へ。を
ま。り。て。人。の。な。べ。て。ま。る。ぶ。く。も。あ。ら。ぬ。事。を。い。つ。ふ
ぞ。る。と。の。た。ま。う。バ。竹。の。名。も。あ。ら。ぬ。物。を。ま。ま
ね。い。と。如。お。ぢ。つ。ん。と。つ。ん。バ。お。う。と。ど。え

まひし河也。

此君と称すハ昔騎
兵参軍王子猷種而
称此君とつハ詩序
の詞なり。朗詠本朝
文粹等みいれり。
きつらハ期しつ
らて。約束せる
といふまらり。

同じ事とハ此君と
称すの句なり。

左衛門の陣ハ建春
門なり。

あらじさどののゆまらむごとさどいひあひせて
あゆむふ。妹君とせうすとつハ詩をすどて又
あつちりきこれハ殿ふていひきしつるほひ
もろくていさどこのつりぬひぬるどいとあやま
くこそありつきとのぬくハなる事ハ何の心
らつをうせんいと中々さるん殿よもていひ
のゝありつきづうつもきこゝめて。奥ぞさせ
ぬひつると語る。糸もらともふかつあつあふ
じ事をすんぶていとをさのうがまバくかいで、
見るとりぐふ物どもいひかそつてかつるとて、
猶おろど事をもちろごあよすんぶて。左衛門のら

あかちりさる清か
が殿よますすて
あまよ病しを御君
有るなり。

とらちすともハ
たとひ取るてい
ふとも。更よ跡を
き事ハかくち草
よせじとのさすい
皇后のち笑ませは
ふなり。
誰の争えん云い。
皇后の帝の御心え
へをいへる也。

んふ入すできこゆほとめていととく。少納言の
命婦とつら。清文まぬらせたるふ。妹事をけい
あこれハ。あもるるをわてさる事やあつと
といせぬハ。あつず。何とも思とていひいで侍
アをゆきさるりの朝臣のとりさるるふや侍
らんとやせバ。とりふすととも。おゑすやせはり。
いれごとをも。殿らんほちうりときさうせはふ
さばさいもろく人をもちこむせぬあもをさつし。

標注枕草紙讀本卷三終

抄章...

明治廿四年四月廿八日印刷
全 年五月一日 出版

版權
所有

標註者

佐々木弘綱
東京神田區小川町一番地

印刷兼
發行者

弦卷七十四郎
新泻縣下北蒲原郡葛塚町

發賣所
六合館

弦卷書肆
東京名橋屋南傳馬町丁三丁目番地

